

114
A13.7



甲子年
舊田所稅多收の金要分と義何

大正十一年四月贈
大隈侯爵邸

當使管内所稅及收入金當分より裁奪田賦
收額形之流経前之成規より逐々減收之法
稅之倒物之如し知彼之手續可計以治
三年定額の金取極以存之無以新稅之額
上納可成方本月二日迄迄之成規在案に依
り新稅之額より舊稅之額に改之該稅ノ率
業皆新舊之別に屬し舊田數百里ノ地方前轉
り開く物產より其ノ人民其種より法を施
設し費額是より鉅大畢竟十年間一千萬
圓之定額より之是は候義之金之稅ハ數回

月五



上申ヲ送ケテ候通ニ方之定額全取極
 以候旨口迄形就セシ新稅或ハ過ニ票稅
 乃ハ支取産物ニ係ル所ノ收納ヲ目算シ一切
 之出入通年ニ概シテ以テ事務ノ後息ヲ取
 リ得ル形ヲ以テ順序ヲ認立シ持久壽功
 之目約確迄ニ上テ着テ手致シテ其後
 之申中存テ要更候ハ諸般ノ事其序ヲ
 先ニ既ニ支消セシ費本ヲ亡失スルノコト
 前進シテ大障害ヲ生可申實ニ懸念
 幣石乃止揚全ニ候案新稅日在案額
 二稅ヲ除クテ外餘ニ定額全以洋年
 中ニ是々テテ通ニ要分設法極仕交即
 六年四月中旬海ニ出テ有之候旨事
 候

以後案ニ上當任事業ニ目約全取
 其後政務程ニ至息以許一容ニ成別
 細写申候旨事ニ付也

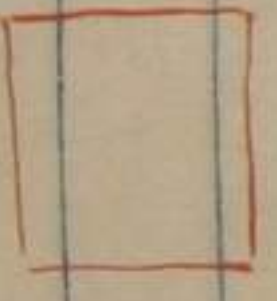
明治八年二月十四日

副松本春里田法總

支取方三條実員殿

伺之通

明治八年五月十九日



第十七卷

方海原の租税取納し分は安永年以降は
 又高直重の租税取入者、おまゝに納む
 而も新増の法租税等は亦その可くは義育
 寺は派寺を罷止む能く由は府内一般の寺
 寺の寺々新増の租税の取納等其後寺々
 以て此の形は寺々直ぐ少く早急ん土地
 人運移り少く事一も別は其外欠乏し
 府内同様に租法を納むは、唯、民衆
 以て優待の租税あり、三十一元一所得
 川手招きや傷る場らるるあり、要る
 地方高直重し、亦分り、法民、勸誘
 之甚切り、法民、亦分り、法民、勸誘

